

シェイクスピアの宮廷医師

— ガレノス医学の実態と限界

遠藤花子

序論

芝居を観ることが人々の最大のエンターテイメントであったイギリス・ルネサンス時代の戯曲には、医学に関係のある登場人物が多く登場する。各戯曲の登場人物のリストにおいて、「医者」(Doctor/Physician)、「外科医」(Surgeon)、「薬剤師」(Apothecary)と紹介されている役が多く見受けられる。*An Index of Characters in Early Modern English Drama: Printed Plays, 1500-1660*によると、「医者」としての役割名を持つ登場人物だけでも、“Doctor”として107の戯曲に、“Physician”として66の戯曲に、「外科医」は37の戯曲に、更に「薬剤師」は22の戯曲に登場が確認できる。そのほか、こういった身分を持たずに治療にあたる登場人物も少なくない。つまり、医療に携わる身分を持つ登場人物が、この時代の戯曲の中に、かなりの割合で描かれていたことが分かる。

実際にシェイクスピアの戯曲における「医者」は、役名に“DOCTOR”が付いているものとして、『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*)のキーズ医師 (Doctor Caius)、『ヘンリー 8世』(*King Henry VIII*)のバッツ医師 (Doctor Butts)、『間違いの喜劇』(*The Comedy of Errors*)のドクター・ピンチ (Doctor Pinch)、“DOCTOR”と付いてはいるが、医者としての役割をしている『シンベリーン』(*Cymbeline*)のコーニーリアス (Cornelius)、医者ではないが、医学的貢献をする『ペリクリーズ』(*Pricles*)のセリモン (Cerimon) や『終わりよければすべてよし』(*All's Well that Ends Well*)のヘレナ (Helena)、その他名前はないが、“Doctor”とだけを登場人物名に持つ戯曲として、『マクベス』(*Macbeth*)¹、『リア王』(*King Lear*)、『血縁の二公

子』(*Two Noble Kinsmen*) が挙げられる。「外科医」はシェイクスピアのどの劇にも登場しないが、「薬剤師」が、『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*) の中に登場する。

これらの戯曲の中で、「医者」は、様々な形で患者に接するが、宮廷が舞台となっている『ヘンリー 8世』、『マクベス』、『リア王』、『シンベリーン』には、宮廷に出入りする医者が登場する。これら4つの戯曲に登場する宮廷医師は、わずかな量のせりふを持つのみであるが、自由に宮廷に出入りし、宮廷内の誰にでも自由に近づく存在であり、ありのままを話すことができるという共通点を持つ。本稿では、シェイクスピアの戯曲の中で「医者」としての役目を持ち、且つ宮廷に出入りする宮廷医師に焦点を当てる。フランス王の難病治療のために、突如宮廷にヘレナが現れる『終わりよければすべてよし』とキーズ医師の登場する『ウィンザーの陽気な女房たち』を除いた、『ヘンリー 8世』、『マクベス』、『リア王』、『シンベリーン』の4作品を中心に、この当時の医学の実態を調査するとともに、それぞれの戯曲において患者と症状、医者による治療と回復の有無についても分析し、シェイクスピア劇に登場する宮廷医師の能力の実態を明らかにすることを目的とする。

1 近代イギリスの宮廷医師

16世紀から17世紀にかけての医学は、医学教育が教会に限られていた中世とは打って変わり、ルネサンスの流れを受け、比較的自由的な医学教育と医学の目覚ましい発展を経験した。とりわけ、これに伴い、この時代には、各大学の医学部において医学教育と訓練が顕著に行われるようになった。特にヨーロッパ大陸においては目覚ましい医学の進歩が見られ、イタリアのサレルノ、パデュア、ボローニャ、フランスのパリ、モンペリエといった大学での医学教育はかなり充実したものであった。

イギリスにおいても自由的な医学教育が行われるようになりつつはあったが、1518年にヘンリー 8世によって創設された医学専門学校、the College

of Physiciansは16世紀末においてもまだ規模が小さく、医学教育において格別影響を及ぼすまでには至っていなかった（Pelling and Webster 165）。また、イギリス国内で医者免許を授与する大学は、オックスフォード大学とケンブリッジ大学のみであった。しかし、この二つの大学の教育内容の主なものは、古くから伝わるガレノスの説に固執し、病気の原因と言えば、体液のアンバランスによるものだと述べる傾向にあった（Furdell 6）のは事実である。

特にガレノスは、当時最も影響力のあった医者であり、哲学者であるとされていた（Wear 131）ため、このガレノスの病気と体液の関わりについて書き残されたものこそが、何世紀にもわたって継承されてきた医学者の必読書となっていた。ガレノスは、人間の体は4つの体液、すなわち、血液、粘液、黄胆汁液、黒胆汁液によって構成されているとし、これらの体液のバランスが崩れた時を病気とみなしていた。この時代には、解剖学や化学療法といった自らの実験に基づいた新しい医学を奨励する人もいたが、彼らは伝統的な医学を重んじる医学者と対立することも多く、ほとんどの医者は、ガレノスに基づいた治療法から離れることなく、ガレノス医学が最も効果があると信じていたのである。

その結果、宮廷医師のほとんどは、イギリスの大学で医者免許を取得したガレノス学派の医者であった。また、宮廷内では、食事に至るまで、ガレノスの論が重んじられていたと言われている。つまり、宮廷では、ガレノス学派の医者たちが最も権威を持っていたことになる（Furdell 7）。そのため、シェイクスピアの中に登場する宮廷医師も、ガレノス医学に基づいた医師であるのではないかと言うことができる。以下の章で、シェイクスピアの描くガレノス医学に基づいていると思われる医師たちの能力を分析していく。

2 患者もなく治療もしない医者—『ヘンリー 8世』

『ヘンリー 8世』におけるバツツ医師は、王の寵愛を受けているクランマー

(Cranmer)が、失脚を企てられているという場面に登場する。バッツ医師は、身分としては宮廷医師として登場するが、患者の治療をすることはない。従って、彼の場合は診察や治療が目的なのではなく、また、医学とは全く関係のない医者であることを、まず指摘することができる。しかし、バッツ医師は、実在したヘンリー 8世の宮廷医師であり、史実によると、ケンブリッジ大学で医学の学位を取った後、the College of Physiciansの“Fellow”を務めた医者である。つまり、バッツ医師は、明らかにガレノス医学に準ずる正統な医者とも言えるが、宮廷内では、非医学的な医者であり、王に仕えている間は過激なピューリタニズムを唱道していたと言われている。その一方で、宮廷内において治療を必要としている男女の治療にあたったことも述べられているため、歴史上のバッツ医師は、少なくとも、医者としての機能も果たしていたのは事実であるが、バッツ医師のような非医学的な医者が宮廷内に数人存在していたことも分かっている (Furdell 11, 24-6)。

『ヘンリー 8世』におけるバッツ医師は、その非医学的な側面が強調されて描かれている。劇中、バッツ医師は、廷臣たちから仕打ちを受けているクランマーと擦れ違う折、次のように述べる。

This is a piece of malice. I am glad
I came this way so happily. The King
Shall understand it presently. (5. 2. 7-9)

ここからバッツ医師が王に宮廷内の動きを知らせる報告係であることが伺える。一方、クランマーは、王の寵愛を受けている司教ではあるが、宮廷内で彼を陥れようとする怪しい雲行きに翻弄されている様子をバッツ医師に目撃され、王に告げ口をされるのではないかと憂慮する。クランマーは、バッツ医師の方が身分が下であるにもかかわらず、警戒して次のように述べる。

’Tis Butts,
The King’s physician. As he passed along,
How earnestly he cast his eyes upon me. (5. 2. 9-11)

クランマーはこのせりふの中で、一応、バッツ医師を“physician”と呼ぶなど、彼が医学関係者であることは認めている。しかし、ここはクランマーのバッツ医師への警戒心がはっきり示されている場面でもある。その後、クランマーの推察通り、バッツ医師は、ヘンリーと共に舞台の2階から顔を出し、窓越しに見えるクランマーの様子をヘンリーに見せている。しかし、最終的に、バッツ医師が登場するのは、クランマーと擦れ違い、ヘンリーにクランマーの恥辱を見せるこの場面のみである。最後の場面で生まれたてのエリザベスの栄光に満ちた未来の姿を予言するのはクランマーの方であることから、ヘンリー 8世にとって本当に信頼できる側近は、バッツ医師ではなく、クランマーであり、医師にも王の側近にもなれなかったバッツ医師の姿をここに見ることができる。

『ヘンリー 8世』のバッツ医師は、医学的な関与は全く認められないばかりか、むしろ、王の悩み相談をする良き召使い、あるいは道化と言った要素が強くある。バッツ医師は、患者の治療や診察をすることはないが、王に自由に近づける存在として、また、王に見たことを自由に報告できる存在として、王の精神状態を保つことに貢献していると言える。バッツ医師は、宮廷内の動向に目を光らせる、『ハムレット』(*Hamlet*) のポローニアス (Polonius) を思い起こさせるような存在でもあるが、最後のエリザベス誕生の場面には登場しないことから、ヘンリー 8世の側近にもなりきれなかった不甲斐ない医師とみなすこともできる。

宮廷において医者としての機能を果たしていないのは、『ヘンリー 8世』のバッツ医師だけではない。医者が“This disease is beyond my practice” (*Mac* 5. 1. 55) と述べるだけで舞台から去るなど、何もできない点においては『マクベス』の医者も同じである。

3 能力の及ばない患者を持つ医者—『マクベス』

『マクベス』では、マクベス夫人が狂気になるとすぐにスコットランドの医者が登場する。しかし、このスコットランドの医者は、イングランドの医者について登場する2人目の医者である。1人目のイングランドの医者は、マルコム（Malcolm）と身の危険を感じてイングランドへ逃亡したマクダフ（Macduff）が世の不幸を嘆いている場面で登場するが、マルコムに次のように伝えるだけですぐに退場してしまう。

Aye, Sir; there are a crew of wretched souls,
That stay his cure: their malady convinces
The great assay of art; but at his touch,
Such sanctity hath Heaven given his hand,
They presently amend. (4. 3. 141-5)

この場面は、この次の場面でロス（Ross）が来て、マクダフの家の全員が皆殺しにされたという無残なニュースを伝える直前に位置する。イングランドの医者は、患者の治療のために登場するのではなく、スコットランドと比較して、イングランドでは王が病気を治療することを告げる。彼は医者が治療不可能な病気は、イングランドでは王による“touch”で回復が可能であることを述べる。つまり、国そのものが抱えている問題は、イングランドでは王の力により回復するが、スコットランドでは、王に国を回復させる医者としての力が喪失していることが暗示されている。イングランドの医者は、スコットランドの惨状とイングランドの良さを伝える、いわゆる使者としての要素が強く感じられる。

イングランドの医師が登場する場面の直後、舞台がスコットランドに移るとすぐに、スコットランドの医者は、マクベス夫人の様子を診るために呼ばれてやってくる。彼は、突然登場し、2日間観察したことをまず述べる。この場面で観客は初めてマクベス夫人の体に異変が起きていることを知ら

される。医者、マクベス夫人に気付かれないように、侍女と一緒に隠れて観察するのみで、治療しようとはしない。*The Changeling*に登場する医者が、狂気になった患者の治療を試みていることから、イギリス・ルネサンス時代の戯曲において、狂気患者の治療が回避される傾向にあったとは言い難い。しかし、『マクベス』における医者は何もしない（あるいはできない）、と言っても過言ではない。マクベス夫人から離れた所からの診察の後、医者はただ不快物を遠ざけるようになどといった指示を侍女に与えるのみである。何も治療ができないマクベス夫人の担当医は、ただ、次のように言う。

More needs she the divine than the physician.—
 God, God forgive us all! Look after her;
 Remove from her the means of all annoyance,
 And still keep eyes upon her. (5. 1. 71-74)

医者は、その後マクベスの所へ行き、マクベス夫人の症状について説明する。医者は、マクベス夫人の病気の回復の見込みはないと悟るが、彼はまた、マクベスの治めている王国の状態の回復の見込みもないことを悟る。医者は次のように述べ、密かに王国を去ることを決心する。

Were I from Dunsinane away and clear
 Profit again should hardly draw me here. (5. 3. 61-2)

医者はマクベスの敗北をほのめかず役割を担っている。『マクベス』の医者は、国家の医者として国家の診察は行ったが、患者であるマクベス夫人の診察はいい加減に終わらせ、患者の状態が、医者が治療できる範囲を超えていると述べ、立ち去ってしまう。それゆえ、適切な治療を受けることもなく、医者に看取られることもなく、マクベス夫人は狂死する結果となる。

実際に、最後にマクベス夫人の死を伝えるのは医者ではなく、セイトン

(Seyton) である。奥から女性の悲鳴が聞こえ、確認しに行ったセイトンが “The Queen, my Lord, is dead” (5. 5. 16) と告げる。この時、既に医者王国から去っているため、医者が付き添ってはいなかったことになる。マクベスにマクベス夫人の死が伝えられるこのシーンは、そこで改めて医者無力さを感じさせられ、医者に見捨てられた患者の死と同時に、マクベスのスコットランド王としての最期をも予告しているようである。医者不在で既に修復がきかない王国の病的な状況が暗示されていると言える。

4 薬の処方と人命救助—『シンベリーン』

精神の疾患により医者が呼ばれるのは『マクベス』だけではない。『シンベリーン』においても同様に、最終幕で女王 (Queen) が狂気に陥り、医者が狂気の治療にあたるが、手の施しようがなく、最終的に、患者が息を引き取ってしまう。更に、『マクベス』と『シンベリーン』に共通しているのは、狂気になった患者が自分の罪を告白し、自分の犯したことへの後悔と恐怖が、病床で語られることである。ただ、『マクベス』の医者とは違い、『シンベリーン』の医者、コーニーリアスは、患者から逃げることはせず、女王の最期の様子を報告する。

『シンベリーン』の前半の場面に登場するコーニーリアスは、非常に優れた医師である。シンベリーン王の娘、イモジェン (Imogen) の暗殺を企んでいる女王は、“these most poisonous compounds, / Which are the movers of a languishing death” (1. 6. 8-9) と言ってコーニーリアスに毒を要求する。女王の悪巧みを心配したコーニーリアスは、毒ではなく、“stupefy and dull the sense” (1. 6. 36) を引き起こすだけの薬を渡す。このコーニーリアスの判断に対して、コリン (Kolin) は、コーニーリアスは道義をわきまえた分別のある医者であり、女王に疑われることなく、女王の意図する悪巧みを食い止める賢い医者である (82) と指摘している。『ロミオとジュリエット』や『パリの虐殺』(The Massacre at Paris) において、頼まれた通りに命を奪う毒薬を調合し、人を死に至らしめる薬剤師とは異なり、コーニーリアスはむしろ

る人命を救う助力をする医者である。実際に、劇中、コーニーリアスの調合した薬を服用したイモジェンが命拾いし、戯曲が喜劇に仕上がっていることは言うまでもない。

劇の最終場面において、コーニーリアスは、精神錯乱状態で死亡する女王の臨終を見届ける役割を担う。そして、コーニーリアスは、女王の悲惨な最期のレポーターとしての任務を果たす。『シンベリーン』の最後の場面において、劇中に起きた様々な出来事の謎が一つずつ解明される直前、コーニーリアスはシンベリーンに女王が死亡したことを伝え、それに引き続いて、女王が王を愛していなかったことや、イモジェンと王の殺害の計画などについて説明する。

シンベリーンはコーニーリアスから女王の死の知らせを受けた時、次のように言う。

Who worse than a physician
Would this report become? But I consider,
By med'cine life may be prolong'd, yet death
Will seize the doctor too. How ended she? (5. 5. 27-30)

このせりふに関してペティグリュー (Pettigrew) は、医者は病人の治療をするものであり、患者の死は治療した医者のみすばらしい反映である (13) と医者 of 無能さを指摘している。とはいえ、戦争で敗北したマクベスとは違い、シンベリーン王は戦争で勝利を掴み取った後に、このことが告げられる。また、女王の策略と死が告げられた後に、そこにいる人物の全員が何らかの幸運に恵まれ、満足感を味わっているため、女王の死に対する哀れみの念と深刻さは消えてしまう。更に、『マクベス』の医者は完全に患者を見放しているが、コーニーリアスが患者の最期を看取っていることも、例え、シンベリーンに医者から死が告げられるのは相応しくないと云われようと、劇全体に人間的な温かさをもたらしていると言える。

ただ、コーニーリアスが女王の狂気に対して、どのような治療を行った

かについての説明はなく、また、どの程度適切な治療を与えたかについての確証はない。おそらく、『マクベス』のスコットランドの医師同様、女王の本性が暴かれた瞬間、治療を拒否したことが推察される。しかし、ほかの狂気患者同様、女王の狂気は医者能力を超越していたことは間違いない。女王の狂気の原因を察知してしまったコーニーリアスはなすすべなく、女王が熾烈な状況の中で最期を迎えたのを観察していたのだろう。コーニーリアスは宮廷医師として、『ヘンリー 8 世』のバツツ医師のような過激さを持つことなく、宮廷人の健康と宮廷内の秩序を保つために登場していると言ってもよいだろう。

5 音楽と優しさを提案—『リア王』

『リア王』では、居場所を失ったリアが錯乱状態に陥った場面で、『シンベリーン』同様、人と人との調和を重んじる医者が登場する。だが、『リア王』に登場する医者について述べる前に指摘すべき点は、医者は、第1・四つ折り本（1608）にのみ登場し、二つ折り本（1623）には登場しないことである。医者の登場しない二つ折り本では、“Gentleman”が四つ折り本の医者へのせりふを述べている。二つ折り本では登場人物の数を減らすために別の場面で登場する“Gentleman”と一緒にした（Foakes 349）と解釈されている。「正典」ともされている二つ折り本から、医者は削除されているが、ここでは、四つ折り本に登場する医者を『リア王』の医者として分析していく。

『リア王』の医者は、狂気に陥った患者の診察をする医者の中でも、狂気という病気と患者であるリア王をよく理解しているという特徴がある。リア王は、正気を失い、医者を必要とするが、医者の適切な判断と治療により回復を見せ、コーディーリアと会話をするまでになる。リア王を案じるコーディーリアが医者へ、回復に関する知識をもっているか（4. 4. 8-9）と聞くと、医者は、たくさんの効力ある薬草がある（4. 4. 14）と答える。その後、コーディーリアとリア王が対面した折、医者は、音楽の力²とコーディーリアの優しさを特効薬にリア王の回復をもたらすことに成功する。ニーリー

が“natural madness and the supernatural possession”に苦しむリアの乱心の特別な2つの治療法は、医者によって施される生理学的な治療と、心理学的な治療である(59)と述べているように、リア王の医者は、リア王の症状に薬草に加えて音楽が効くと悟り、音楽を流すように促し、更にコーディーリアの力を借りることで治療を試みる。

錯乱状態から昏睡に陥ったリア王がコーディーリアのテントに運ばれ、リア王の医者が音楽療法を用いた時、最初の音量では足りず、効果を求めたもっと大きな音で音楽を流すように“Please you, draw near. – Louder the music there!”(4. 7. 25)と頼む。実際に、シェイクスピアの戯曲の中の音楽療法は、『ペリクリーズ』のセリモンも実行し、仮死状態になったセイザ(Thaisa)の治療に成功している。精神治療のための音楽療法は、時々しか用いられることはなかったと言われているが、長い歴史がある(Hoeniger 261)ことも分かっている。

また、医者は、リア王にとって、コーディーリアの優しさが最高の薬となることを見抜いて、“Madam, do you; 'tis fittest”(4. 7. 43)と述べ、音楽療法の効果と併せてリア王に最善の治療を施す。確かに、人間の冷たさを思い知らされ、気が動転したリア王にとって最も必要だったものは人間愛に満ちた心の拠り所と精神の落ち着きであったことに間違いない。リア王が身動きし始めた時の、最初の答えは、“You do me wrong to take me out o’th’grave.”(4. 7. 45)であった。精神的な打撃から、まだ朦朧としている時のせりふではあるが、この言葉からはコーディーリアに対する後悔と懺悔の気持ちが読み取れる。更に意識の回復をみせたリア王は、コーディーリアに“Do not abuse me.”(4. 7. 76)と言う。ここは引き裂かれていた親子が和解した感動的な瞬間であり、医者がこの場面を導いたと言っても過言ではない。

ただ、最後の場面で、コーディーリアの死を目の当たりにしてしまったリア王の心は打ちひしがれ、もはや医者能力の範囲を超えてしまう。そしてリア王は単なる狂気や精神錯乱を通り越し、悲嘆のあまり死を迎える。狂気患者への的確な治療方法を把握していた医者にも、最期のリア王の狂

乱に対しては、何もできなかったのである。リア王が狂気から一旦は回復を見せたことから判断して、『リア王』の医者はほかの医者と違って狂気の治療に秀でていたということが出来るが、コーディーリアを抱きかかえて悲しみに打ちひしがれるリア王に医者は付き添ってはいなかった。

患者が死んでしまうという点においてはほかの戯曲と同じであるが、ただ、医者が一緒にいなかったのは、『マクベス』の医者のように、王の所業を恐れて逃亡したのではなく、患者の重い症状に手の施しようがなかったためでもない。『リア王』の医者は人間愛を重んじる有能な医者であったが、前述したように、1623年に出版された二つ折り本では、“Doctor”が“Gentleman”に変えられ、音楽療法に関する言及も削除されている。理由は、登場人物数削減のためと言われているが、ガレノス医学を尊重する宮廷医師には、狂気の治療は不可能であること、狂気に適切な薬を使うことも考えられないことなどから、“Gentleman”に変えられたと言うことはできないだろうか。この“Gentleman”こそが、ガレノスに打って変わる新医学を主張し、ガレノス学派の医者と対立した医者の免許を持たない医者を指していたのではないだろうか。ここから強調できることは、従来の宮廷医師が新医学を提唱するのは不都合であり、当たり障りのない“Gentleman”のせりふに変えることで、狂気の治療への新たな可能性を見出したのではないか、ということである。

結論

シェイクスピアの宮廷医師は、『ヘンリー 8世』のバツツ医師のように、何もせず、単なる宮廷人の一人として登場することもあるが、『マクベス』、『シンベリーン』、『リア王』に見られるように、一般的な病気治療のために呼ばれた医者ではなく、事情があって狂気に陥った患者の診察に訪れていることがほとんどである。治療のために医師たちはそれぞれ診察にあたるが、『マクベス』と『シンベリーン』の医者は何もできずに患者は死んでしまう。『シンベリーン』の患者は最期を看取ってもらえるが、『マクベス』で

はそれすらなく、医者は逃亡してしまう。『リア王』では、精神錯乱になったリア王は最終的に死んでしまうが、途中、医者之力により、劇的な回復をみせる。『リア王』の医者は、唯一、症状の緩和と治療に成功する有能な医者に見えるが、後から“Gentleman”に変えられていることから、宮廷医師としての登場が回避されたことになる。つまり、狂気患者の治療に成功することは、従来の宮廷医師の特徴から逸脱してしまうことになるのである。

宮廷医師は一般的に、病気の治療ではなく、むしろ人間の内面的治療に携わる傾向にある。今回取り上げた4つの作品の中で、医者たちは治療よりも人間との接触や宮廷内の秘密を守ることを重視している。ガレノス医学を提唱する宮廷医師たちは、すべてを体液のバランスに換算して物事を見据える傾向にあるため、個人、宮廷、更には国家のアンバランスについての言及が顕著にみられる。唯一、ガレノス医学から外れている『リア王』の医師は、薬草や音楽療法などによる治療を試みているが、偏った治療に固執していた医師たちは、例えば、マクベス夫人に対して身の回りの物への注意を呼び掛けるなど、わずかなアドバイスだけが可能であった。宮廷医師には、患者の罪の把握や、宮廷内の病的な側面の治療に携わることはあっても、患者と真摯に向き合い、妥当な薬を与えるなど、患者の回復につながることを試そうとする姿はなかった。

つまり、シェイクスピアの宮廷医師たちは、治療に失敗したと言えるが、これは、狂気の治療もすべてガレノス医学に基づいた治療法に頼っていた医者たちの限界でもあったのだ。限られた知識だけでは心身の治療は不可能であり、ガレノス医学に基づいた医者たちの実態と限界がここに見られる。

註

- 1 本戯曲において医者は、“A Scottish Doctor”と“An English Doctor”の2人が登場する。

- 2 二つ折り本では“Gentleman”のせりふからも音楽に関する言及は削除されている。

参考文献

- Berger, Thomas L., William C. Bradford, and Sidney L. Sondergard. *An Index of Characters in Early Modern English Drama: Printed Plays, 1500-1660*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Foakes, R. A., ed. *King Lear*. By William Shakespeare. London: Thomson, 1997.
- Furdell, Elizabeth Lane. *The Royal Doctors 1485-1714: Medical Personnel at the Tudor and Stuart Courts*. NY: U of Rochester P, 2001.
- Hoener, F. David. *Medicine and Shakespeare in the English Renaissance*. Newark: U of Delaware P, 1992.
- Kocher, Paul H. “Lady Macbeth and the Doctor.” *Shakespeare Quarterly* 5.4 (Autumn 1954): 341-9.
- Kolin, Philip C. *The Elizabethan Stage Doctor As a Dramatic Convention*. New York: Edwin Mellen, n.d.
- Pelling, Margaret and Charles Webster. “Medical Practitioners.” *Health, Medicine and Morality in the Sixteenth Century*. Ed. Charles Webster. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- Pettigrew, Todd H. J. *Shakespeare and the Practice of Physic: Medical Narratives on the Early Modern English Stage*. Newark: U of Delaware P, 2007.
- Shakespeare, William. *The First Quarto of King Lear*. Ed. Jay L. Halio. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- . *Cymbeline*. Ed. J. M. Nosworthy. Walton-on-Thames: Thomas Nelson, 1997.
- . *King Henry VIII*. Ed. Gordon McMullan. London: Thomson, 2000.
- . *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. London: Thomson, 1962.
- Silvette, Herbert. *The Doctor on the Stage: Medicine and Medical Men in Seventeenth-Century England*. Ed. Francelia Butler. Knoxville: The U of Tennessee P, 1967.
- Wear, Andrew. *Knowledge & Practice in English Medicine, 1550-1680*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.